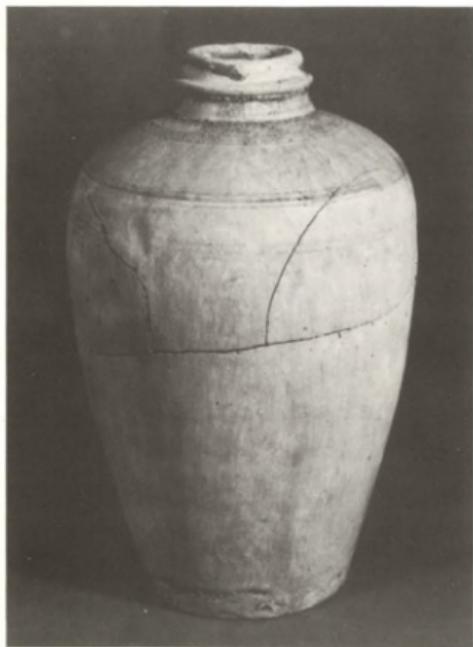


倉持遺跡



昭和 58 年 3 月

茨城県明野町教育委員会

はじめに

一昨年の第一次発掘調査にひき続いで行なわれた第二次発掘調査は、昨年11月に開始され、この3月に無事終了することができました。第一次の調査では多くの縄文土器や石器が出土して、縄文時代中期から後期（約4000年前）の墓地の跡や、弥生時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓とよばれる墓の跡や古墳が検出されました。どうもこの地域は長い間集落や墓地として利用されてきた場所であったようです。そして、第二次の調査では縄文時代、弥生時代の住居跡の他に旧石器がみつかり、縄文時代よりもさらに古い時代、先土器時代（約1万年以上前）にもこの地には人が住んでいたことがわかりました。そしてずっと時代を下って鎌倉時代以降の生活の跡（建物跡や耕作の跡）もみつかり、今まで明野町では不明だった先土器時代、歴史時代の歴史の研究に新しい灯がともることになったことはすばらしいことだと思います。今後はこうした時代の歴史研究を進めながら、文化財を守るために住民の人たちとともに保護対策を講じていきたいと思っています。

遺跡（埋蔵文化財）の発掘調査というのは、古代の人たちが生活していた跡を土を掘って調べることですが、スコップで土を掘ったり、移植ごてや竹バラ、時には筆や耳かきのような小さな道具を使って細かい作業をしたり、地味で根気のいる仕事です。何千年、何万年も前にいたわたしたちの先祖が手で築いた生活の跡はやはり、人間の手によって掘るしかないので。そしてそれには長い時間もかかります。今後は住民の方々の御理解をいただき、研究者の人たちと一緒にになって、住民の手による調査、住民自身による明野町の歴史を創造していくなければならないと思います。こうしてこそ初めて、埋蔵文化財が国民共有の財産（文化遺産）と言えるのではないかでしょうか。

今回の発掘調査に際しましても、たくさんの方々の御協力、御理解をいただき、ここに改めてお礼を申し上げるとともに、今後の御協力、御指導をお願い致します。

昭和58年3月

明野町教育長 長塚 誠 厲

1. 第二次発掘調査の経過

昭和56年7月から10月にかけて行なわれた第一次発掘調査にひき続き、57年度は一次調査区の西側約2400m²について、確認調査及び発掘調査を57年11月より58年2月にかけて実施した。調査対象地となったのは真壁郡明野町大字倉持字中妻681番地、同685番地で、内681番地の北側約650m²部分については発掘調査を行ない、南側部分については東端西端の部分1.5m×15mの南北のトレントを2ヶ所入れて確認調査及び発掘調査を行なった。また、685番地については、同丘陵の最も北端に位置しており、この部分は、表土を剝いで遺構存在の有無を確認した。

第一次調査は地形に沿って幅10m長さ44mの南北に長いトレントを設定したが、台地縁に沿って長さ400m、幅150mにわたる遺跡全体を年次的に計画を立てて学術調査していくためには、調査区が耕作中の土地ということもあり、調査計画を一部変更していった。

平均標高34mの丘陵全体に方向を磁北に統一した20m×20mの方眼をかけ、さらに中を4mグリッドで分けて記号をつけた。調査区は一年次ごとに地形測量を行ない、耕作の支障がない部分について調査を実施することにした。

第二次調査は南側のトレント設定から開始された。この部分は東側から入り込んでいる谷地形の影響で緩く傾斜して窪んでいるとされていたので、谷地形の状況を確認するためのトレントであった。しかし、トレント内で確認された状況は予想と異って、谷は東側のトレントに末端の部分が辛じて確認されただけであった。第一次調査で確認された深さ3mに近い谷は、西側20m程の所で終わっているのである。そしてトレント内で確認された遺構は中世のものと思われる大きな溝（掘）状の遺構で、地形の表面が窪んでいたのはこの遺構のせいであろうと判断された。トレントは遺構や土層の観察が終了次第埋め戻し、以後北側の調査に移った。



遺跡南側の発掘風景



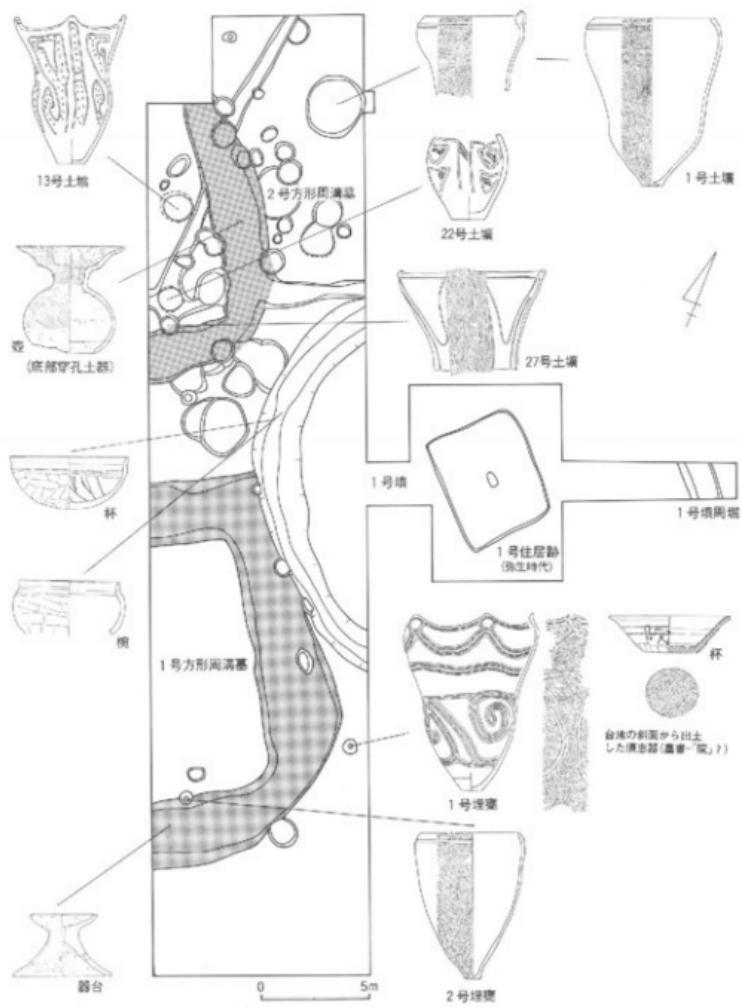
第1図 遺跡位置図



第2図 調査区



第3図 第二次発掘調査区全体図



第4図 第一次発掘調査区遺物出土状況

2. 検出された遺構（第3図～6図）

発掘調査区では4m×4mグリッドで掘り下げていき、土層の堆積状態を観察しながら層位ごとに上層から剥いでいった。プラン（上面からの遺構の形）の確認は慎重に行なっていったが、北側ではローム層を掘り込んでいる縄文時代の遺構の検出は土層がはっきりせず、かなり難儀した。中央部と南側では表上から20cm程の所で、耕作の影響はほとんどなく、堅くしまった暗褐色土層を掘り込んでいる遺構の検出は比較的容易になされた。なお、調査区におけるソフトローム面の深さは北側で表土から30cm前後、南側は60cm程で、やや北側から南側に強みに向かって緩く傾斜している。

検出された遺構はグリッド内で順次番号をつけ、出土した遺物もグリッド内で層位ごとに取り上げていった。

暗褐色土層には縄文土器や内耳土器、石器等が多量に出土し、遺構の複合による搅乱があると推定された。以下、検出した遺構、出土遺物についてその概略を述べる。

1. 土壙（縄文時代中期～後期）

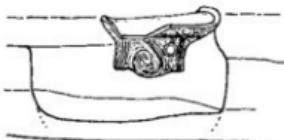
調査区全域にわたって存在している。特に北側部分に集中している傾向がある。南側にいくにしたがってまばらになっているが、これは歴史時代の遺構に搅乱されている可能性があり、概には言えない。土壙の数は80にものぼるが、これは4種類に分類される。1つは小呪穴とよばれるもので、径が1m前後の不整円形、中央部附近に柱穴らしき小さな穴があいている。次に袋状土壙、またはフラスコ状ピットとよばれるもので、上面部分が狭く、底部が広くなつてオーバーハングするものである。大きさも大小2種類ある。なお、この中には底の隅の部分に土器がおかれた様な状態で出土しているものもあり、貯蔵用に使用されたものと考えられる。3つ目は、謂所貯蔵用のピット（穴）と考えられるもので、円形に掘られ、深さもかなりある。あと1つは性格不明のもので、形態もさまざままで一定しておらず、土器片が少量出土するものである。これらの土壙の中には骨片や炭化物等が検出されるものがあり、墓壙として、あるいは貯蔵用として使用されたものであろう。

2. 住居跡（縄文時代、弥生時代）

竪穴住居跡が6軒みられる。内一次調査で検出された弥生時代後期の住居跡と同じ時期のものが2軒、他は縄文時代のものであろう。弥生時代の住居跡はやや四角形を呈するもので、大形のものと小形のものがある。炉や柱穴の存在が定かでないが、床面は貼り床でカチカチに堅くなっている。縄文時代の住居跡は形もさまざまで、炉跡、柱穴の位置もはっきりしない。床面だけは堅くなっている。短期間の使用によるものであろうか。

3. 埋甕（縄文時代中期～後期）

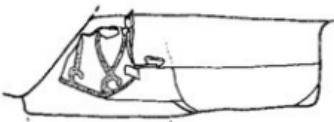
骨片の入っている埋甕が調査区の東側で5ヶ所みつかっている。深体を逆に置いてあるもの、正常に置いてあるもの等がある。大部分のものが上面に搅乱を受けて破損しており、骨片も極少量検出されただけで明確なことは不明である。



第5図 埋甕(8F-6)

4. 集石遺構（縄文時代中期）

調査区の東側で検出された河原石の集石。數十個の石が詰められた様な状態で出土している。上面の石は被熱して赤化している。



第6図 埋甕(7F-24)

5. 方形周溝墓（古墳時代前期）

一次調査で確認された1号、2号方形周溝墓の西側部分が検出されている。上面の掘り込み面は明確であるが、下面是他の造構と複合しており不明確である。1辺が15～17m、幅1.5～2mで、今回2号方形周溝墓の西側に並んでさらに1基(3号方形周溝墓)検出され、計3基になった。

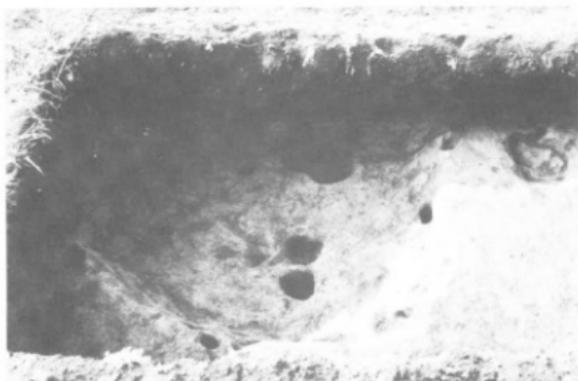
6. 溝状遺構・路状遺構・築地状遺構（歴史時代）

調査区の中央附近を東西に走る二重の溝があり、外側の広い溝は改修された可能性がある。東から西に緩く傾斜しており、西側には溜池の様な深い窪みがある。路状遺構はこの溝と並行しており、幅1m、厚さ20cm程で堅くしめられた土の中には土器片や細かい石が多量に混入している。なお、北側には側溝の様な小溝がみられる。築地状遺構は東側で前述の造構とほぼ直角になっており、粘土で構築されている。四角い土壤（歴史時代の土壤）はこの内側にしか検出されておらず、これ等の造構が墓域を区画するものかも知れない。

3. 第二次調査の成果

第一次調査で確認された造構は墓地としての性格が強く、この地が台地の北端であることがらもそれがうかがえる。二次調査ではさらに多くの墓壙及び住居跡が検出され、集落が内陸部に向かって展開していることを予想させる。さらに、今度の調査では造構は検出されなかったが、先土器時代のナイフ形石器、尖頭器なども出土した他、これまで明確でなかった歴史時代の造構も検出されており、今後の研究調査に新たな課題を投げかけたといつてもいいでしょう。

検出された遺構



土壤-小豎穴(1 T)



土壤-袋状の小豎穴
(7 G - 9)



住居跡-弥生時代後期
(8 F - 17)



検出された遺構

1号方形周溝墓北西
コーナー周辺
(7F-15)



2・3号方形周溝墓と
井戸状の遺構
(8F-14)



四角形の土壙群
(8G-8)

検出された遺構



溝状遺構の掘り込み
(7 G - 15)



畑の畝と思われる遺構と土壙のプラン確認状態(8 F - 16)



築地状遺構と1号方形周溝墓のプラン確認状態(8 F - 12)



検出された遺物

円形のプランをもつ土壙で、縄文時代後期の土器片が数片出土しただけで、他は何も検出されなかつた。



土壙内の縄文土器
出土状態
(7 G - 9)

調査区の東側で検出された埋甕と周辺に出土した凹石と縄文時代後期の土器片。埋甕は胴下半部が消失している。周辺には焼土や柱穴が確認されている。



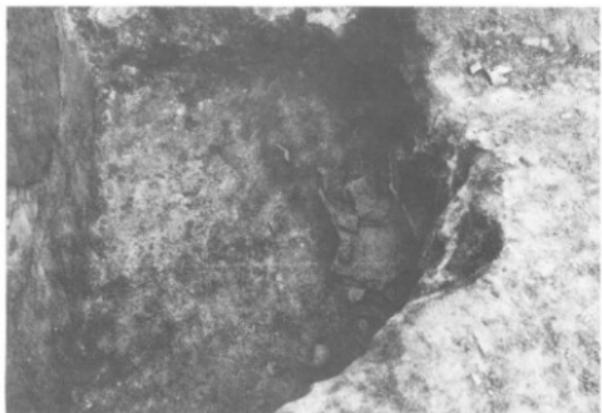
埋甕と周辺の遺物
出土状態
(8 F - 6)

埋甕と凹石、石臼の出土状態
(8 F - 13)



検出された遺物

調査区の東端で検出された集石、直径30cm程の範囲に數十個の石がつまっている。深さ20cm程まで堆積しているが、そのほとんどが被熱している。



上面が狭くて底面
が広くなるフ拉斯コ
状(袋状)になっている。
東側底の部分には
縄文時代後期の深
鉢が置かれた様な状
態で出土している。



袋状土壙の深鉢出
土状態(7F-15)

住居跡の床面から
出土した弥生時代後
期の土器、床面は貼
り床で堅くなってお
り、土器は東南隅で
検出された。

弥生土器出土状態
(8F-18)



検出された遺物

平安時代の終わり頃の土壤から出土した上師器の杯や灯明皿。南側には粘土が堆積しており一部被熱している。粘土の中には纖維状のものが多く含まれている。



土壌墓と焼成粘土
(8 F - 12)

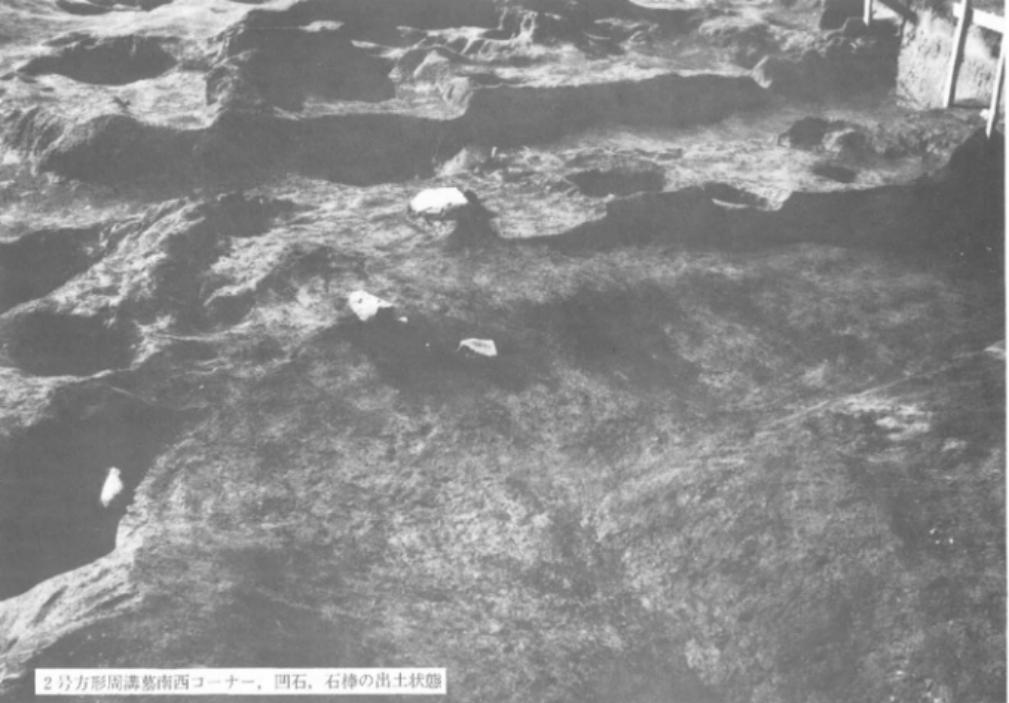
第1トレンチ内で出土した内耳土器と河原石。土壌のプランは明確でないが、内耳土器の出土する遺構には、ほとんどこうした河原石が伴っている。



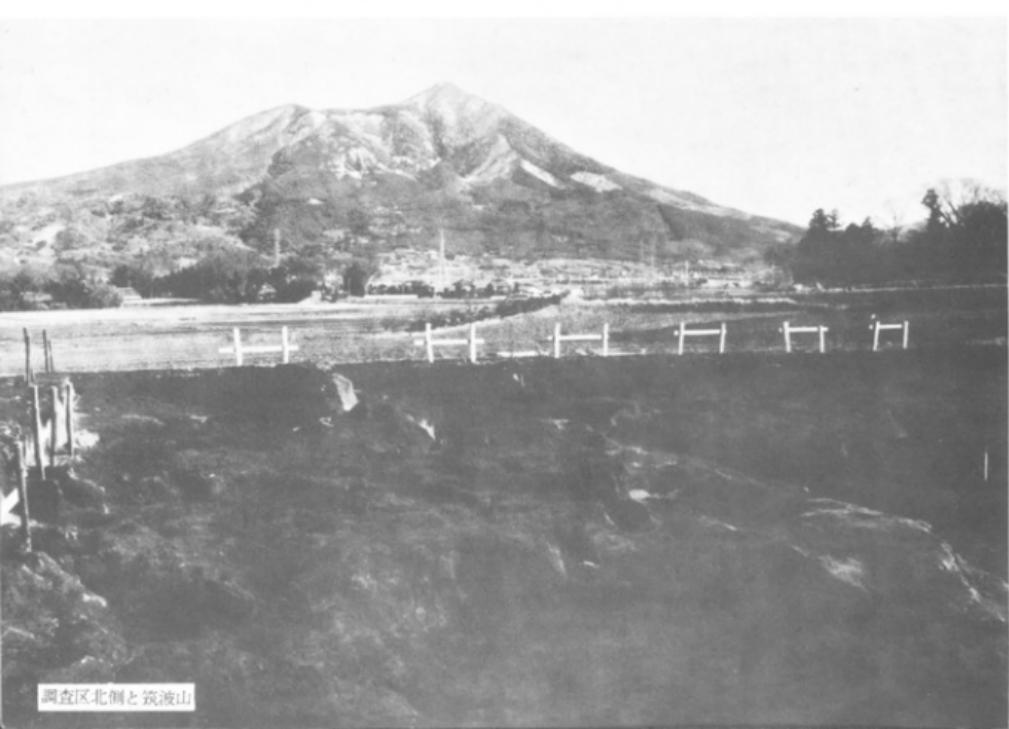
内耳土器と石の出土状態(1 T)

築地状造構で囲まれた内側の小穴から出土した瓶子。一度割れた部分をうるしの様なもので接着して埋めている。柱穴に埋めて鎮墳具の意味を持たせたものか。

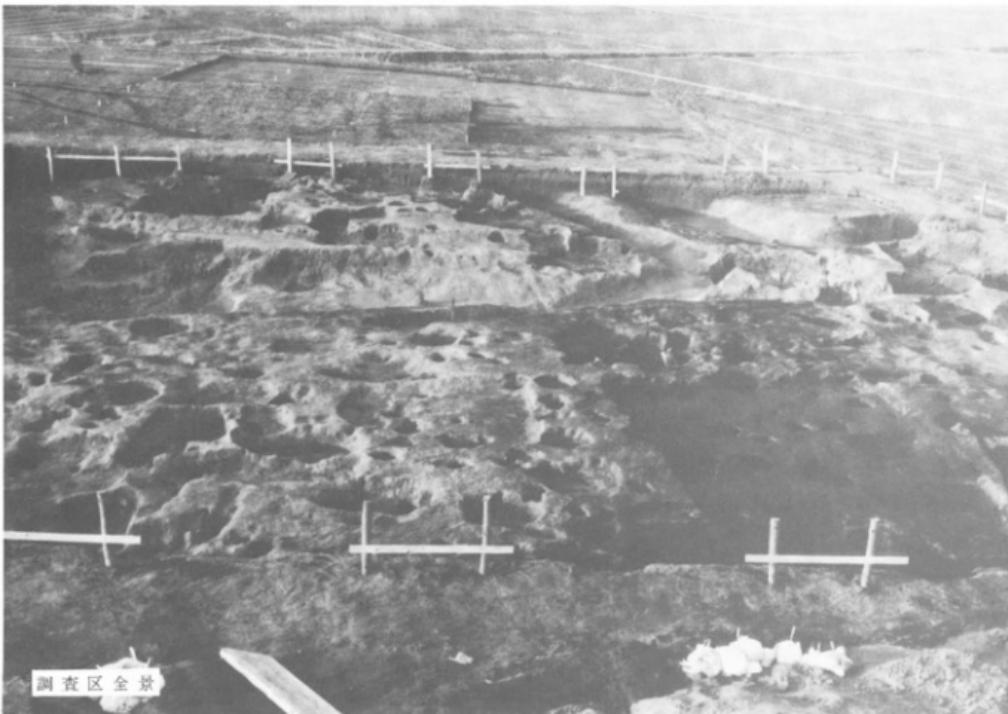
瓶子出土状態
(8 F - 12)

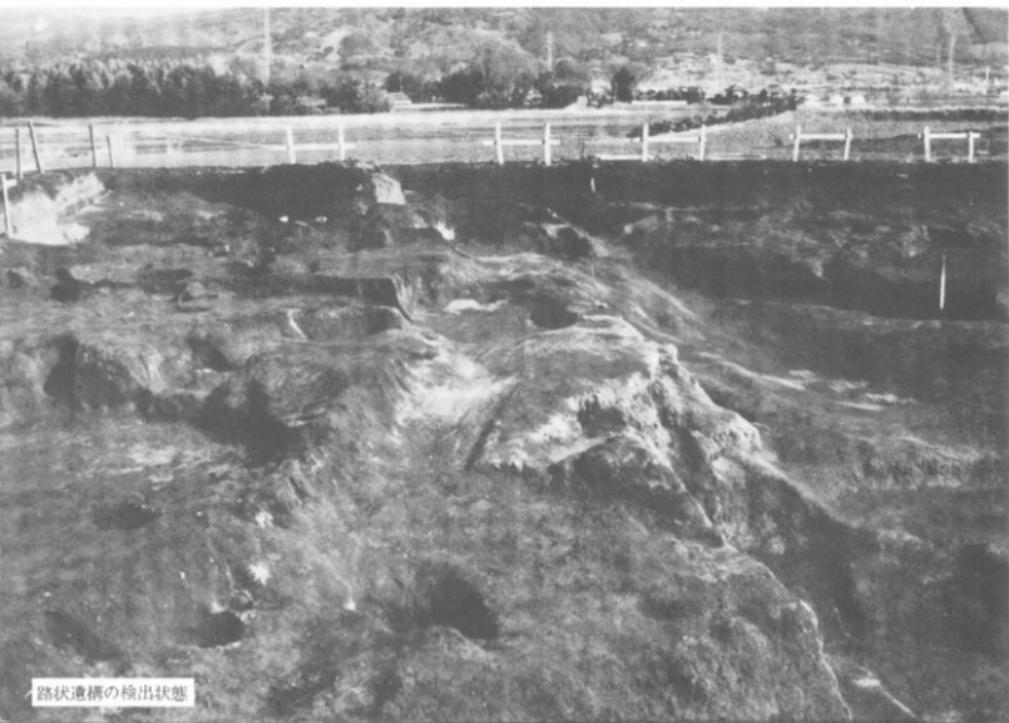


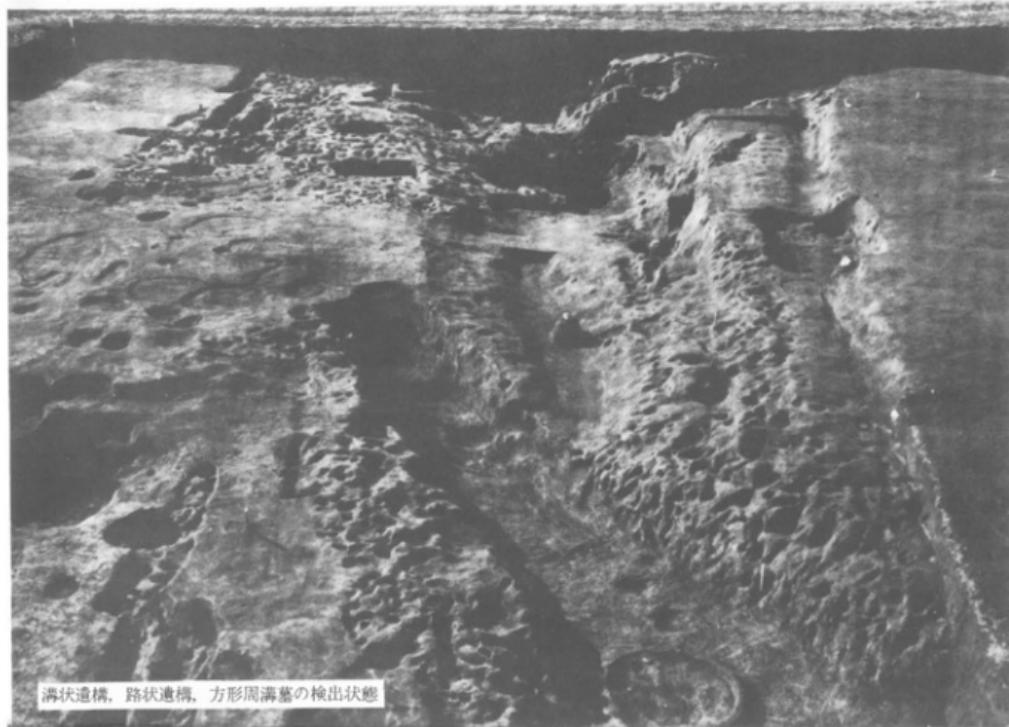
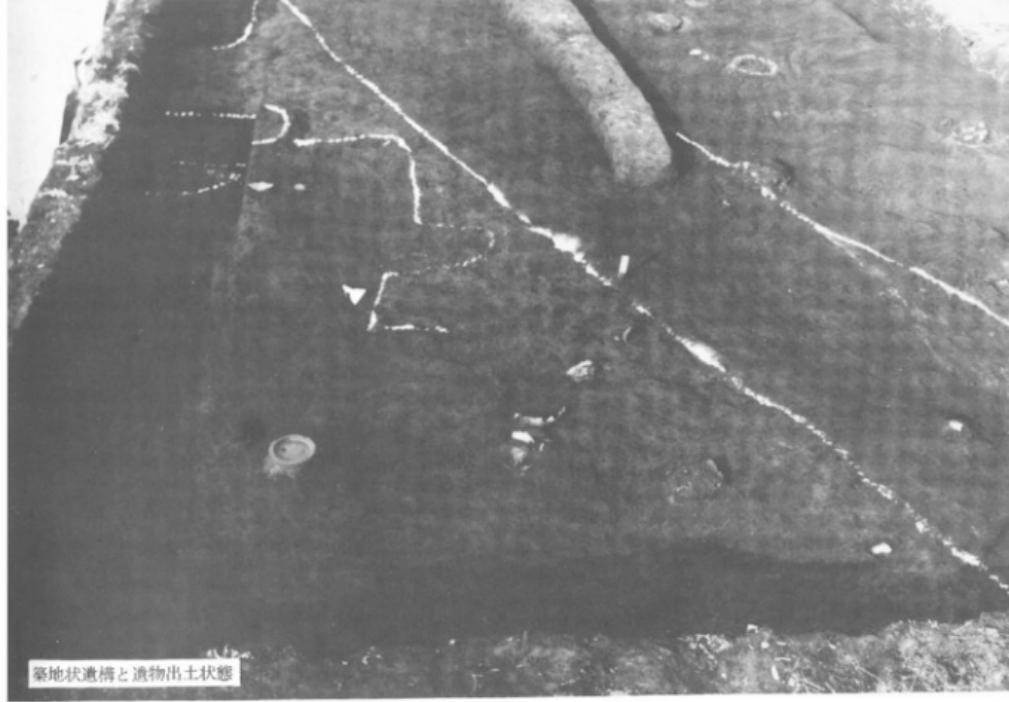
2号方形周溝墓南西コーナー、凹石、石棒の出土状態



調査区北側と筑波山







くわ むち
倉持遺跡

発行年月日 昭和58年3月31日
発行 明野町教育委員会
茨城県真壁郡明野町
海老ヶ島1300-1
印刷所 ワタヒキ印刷株式会社
水戸市城東1丁目5-21